

下野市立古山小学校



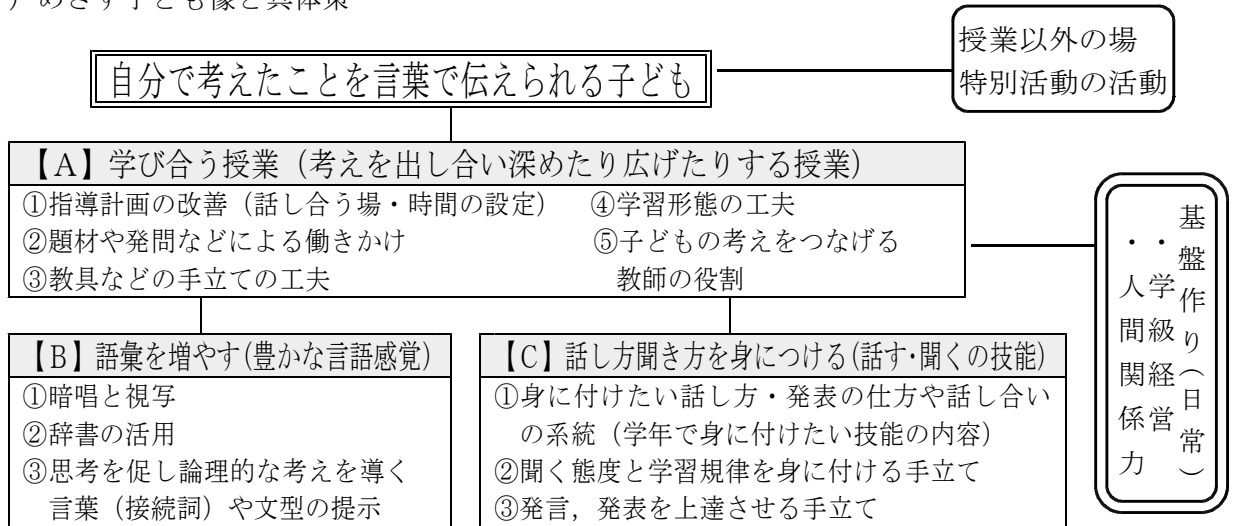
1 学校課題

表現・コミュニケーション能力の育成をめざして
～言語活動の充実と、学び合う授業づくりを通して(2)～

2 本年度の研究について

昨年度に引き続き、上記のテーマで国語・算数での授業改善を柱に課題研修に取り組んだ。

(1) めざす子ども像と具体策



○めざす子ども像に迫るために

- ①「言葉で」伝えるために、語彙を増やすことが必要である。【手立てB】
- ②「伝えられる」ようになるために、話す・伝える活動の場で話し方・発表の仕方や書き方などの表現技能を身に付け活用させたい。【手立てC】
- ③言葉で伝えることが「自分の考え」になるように、思考が促されたり考えを深めあったりする活動が授業になければならない。【手立てA】

(2) 研修の進め方

- 4回のS&Uコラボ研究授業を柱に実践的な研究を進める。
- 各学年の研究授業に当たって低中高ブロックごとに指導案検討会を運営し、発達段階や指導の系統、児童の実態などを検討し合い課題解決を図るとともに、普段の指導に生かしていく。

(3) 授業研究

(☆はS&Uコラボ事業として実施)

月日	研究授業	指導助言者 (☆はS&Uコラボ事業)
7.1	6年算数「比例と反比例」	☆宇大教育学部教授 日野 圭子 先生
9.11	2年国語「お手紙」	☆宇大教育学部准教授 森田香緒里先生
10.28	1年算数「3つのかずのたしざん、ひきざん」	☆宇大教育学部教授 日野 圭子 先生
12.6	4年国語「ごんぎつね」	(校内研修)
12.11	3年国語「三年とうげ」	☆宇大教育学部准教授 森田香緒里先生

3 成果のみられたこと

(1) ハンドサインの活用…【手立てC-②】 および【手立てA-⑤】

発言する際に①通常の見解を述べたいときの手の上げ方の他に、②同意、③異なる考えや反論、④付け足しや質問、の4種の挙手の仕方を活用するようにしている。ハンドサインが定着し活用されると、児童にとっては他の意見と比べながら自分の考えを意味づけるという思考活動を行うことになる。あるいは、教師にとっては、挙手の種別を見取って、次にどの児童の意見を取り上げたりつなげたりしていけばいいかという意図的指名の手がかりになる。

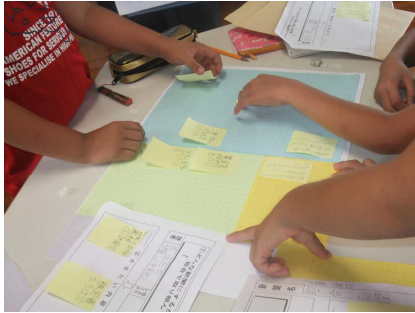
また、挙手の種類で自分の意見の中身を表すだけでなく、手を小さく挙げて「自信はないんだけど…」という発言意欲(気持ち)を表すこともある。

ハンドサインや挙手は、児童にとっては自分の考えの表示であり、集団思考への参加表明の大事な表現行動である。

(2) 発表ボードや付箋紙の活用・・・【手立てA-③】

児童の様々な考えを取り上げ、みんなで練り合うために、発表ボードを活用することが多い。本年度はとくに、グループで考えをまとめてボードに書き発表し合うという使い方が多く試みられた。また、グループなどの小集団のメンバーがもつ意見を交流させ、練りあっていく過程に有効な手立てとして、付箋紙を活用する機会も多くもたれた。各々の意見を比較したり関連づけたりする思考活動が、付箋紙を移動したり貼り替えたりという行動とともに活性化されるという効果は大きい。

発表ボードや付箋紙の活用は、機会が多く設定され何度も経験すればするだけ、児童の活用の仕方が上達し洗練され、思考や表現・コミュニケーションを促すアイテムとしての有用性を増す。



(3) 授業研究

本年度の授業研究を通じて、小集団学習（グループやペア学習）の機能や、児童の考えを拾いつなげ学び合いを組織する教師の役割について考えてきた。

①グループ活動での練り合い【手立てA-④】

上記のような教具による手立てや授業の様々な場面に小集団学習を意図的に取り入れることで、話し合い深め合っていく学習がうまく行われるようになってきている。拙くともその子の考えが言葉となって出てくるような話し合いが行われるようにすることを心がけねばならないこと、合意形成の過程に必要なスキルを段階的に指導し身につけさせていくことなども小集団学習で育てたいことの一つであることが授業研究会では話題となった。

②教師の「つなぐ」役割【手立てA-⑤】

児童の言葉を拾い他の児童に返していくという「つなぐ」だけではなく、個々の児童に対して思考活動とその子の表現する言葉とを「つなぐ」という意味でも、「つなぐ」というキーワードで考えた教師の役割は大きいということを再認識した。

そのような意味でも、算数では言葉だけでなく具体物操作や図、体験活動なども大切にした上での言語活動が必要になる。

③思考を促す言語活動【手立てA-②】

3・4年国語で「一文で表す」活動を位置づけた読み深めの指導を試みた。大切な言葉に着目したり要約して表現するために思考が促されたりして、有効な言語活動であった。要約力は学力の基幹であるので大いに活用したい活動であった。

また、「書く」ことを授業の要所要所に取り入れようと意識して授業を行う学級では、考えることを厭わない態度や着実な思考力などといった点で児童の変容が大きいと実感することもあった。

4 今後の課題

- 国語では、筋道のある思考を言語化する力はまだ十分とはいえない。表現・コミュニケーションの中身をより充実させていくには「書く」ことの意義は大きいと考えられる。
- 算数では、様々な算数的活動により一人一人の思考を引き出していくという授業の充実を今後も図っていかねばならない。そのことは児童の基礎基本の定着に差がみられるという本校児童の実態にとっても必要なことである。
- 授業の質を上げるとともに、特別活動などの充実により、児童が様々な場での表現活動を行うことや学級集団以外の集団でのコミュニケーションを図ることなどにも改善の余地がある。